

# 龍樹の六十頌如理論について

山 口 益

## 緒 言

一、所謂五部論の第二書なる本論偈に就いては漢譯に宋天竺三藏施護譯の一本と、西藏譯に於てはコルデイエ丹珠爾部目錄の經註 (mdo-kyrel) 中に記する左の二本存する。

- (1) Tome Tsa, XVII. 2. Rigs-pa drug cu-pahi tshig-lekur byas-pa shes-bya ba | yuktisāstikārikā nūna | 22b, 2—25a, 7.
- (2) Tome Ya, XXIV. 1. Rigs-pa drug cu-pahi kyrel-pa | Yuktisāstikāryiti | 1. — 33b, 3.

右西藏譯中の(1)六十如理論偈は龍樹所造、印度の Mūtiagñi と西藏の ni-ma grags (Suryakṛti) との譯、(2)六十如理註は中論初め幾多の中觀論書に註釋を製した月稱 (Candrakṛti) の所造、印度の Jinanitra, Dānaḡṭa, Ālendraabodhi と Shu-chen の Ye-ges sde (Gnānasena) との譯を記するものである。云ふまでもなくその(2)は(1)の詳細なる註釋であり、その註釋には常の如く偈を一々引用して註するから、本偈の研究に際して差し當り異版本を簡單に閲檢する便宜を得て居ない我々にとりて

は、その註所引の偈及びその註釋の意味によりて本偈の校訂をする他に方法はない。而して此月稱註と本偈とは上記の如くその翻譯者を異にしては居るが、その偈の形に於ては、下に先づ本偈を掲げ月稱註の偈を以て校訂する所によりて見らるゝ如く、兩本の上に甚しき相違の點少なく、原文の讀方に於て兩本の上に瑣少の相違のみは見らるゝが、本偈所用の原本も月稱註引用偈の原本も殆ど同じものであつたらうと思はれる。かくの如くして此西藏譯六十頌如理論はテキストとして略完全に近い體裁にまで至り得るものと想ふ。

二、本偈の偈數について此を勘ふに、漢譯は一行の歸敬序偈と六十行の正宗偈と六行の流通偈とより成り、西藏譯二本は共に一行の歸敬序偈と五十九行の正宗偈と終一行の廻向文に相當する偈とを有する。漢譯と西藏譯と中間の五十九偈は略一致するが、漢譯の歸敬偈はその内容に於て西藏譯のそれと一致しながら偈の句が七字一句より成れることは、他の一致する五十九偈の形より推して少くともその原形の異なる處であり、又此長句の歸敬偈が西藏譯には存せざる終の流通偈とその形を相應せしむる點等に於て、茲に西藏譯との相異が見られるのである。乃ちその偈數及びその始と終に於ける偈の形等の相異よりして、此六十頌如理論には現在二様のテキストが存することになる。

併し漢譯の第六〇偈が西藏二本の如く廻向文の内容を具へざることは、後第六〇偈下に於ても一言する如く、これ或は終六行の長句の流通偈に廻向の内容を有するものがある爲でもあらうし、現

にその第六〇偈の字句の一部分には明らかに西藏所傳の語が見出され、又西藏所傳の第六〇偈が廻向文たることはそれ丈にて何等無理なる跡は見られないのであつて此を他の中觀論系諸論偈の一般の形等より見ても、どうしても長句の流通偈の六行は、後に附加せられた觀があり、旁々以て本論偈は西藏所傳の方にテキストとしての完全態が見られる様に思ふ。

加之、下に屢々記する如く現在の此漢譯本には、一々の偈句の内容の完全に言ひ盡されざるもの、前後の脈理の理解されてなきもの等多々その難點の見らるゝことであつて、此は固より一分は漢譯者の過失に依るとは云ひ條、又テキストの不全なることもその一分の因由であつたでなければならぬ。

三、本論偈が五部論書中に於ける位地等については後歸敬偈下に月稱註を引用して此を述べることとする。その他注意せらるべき教理等についても各偈の下の解釋に於て此を敍することであるが大體から云つて本論偈所論の傾向は大乘二十頌論と共に一系統を形造るの觀があり、中論、七十空論、十二門論の専ら體系的、組織的に究理し行く一系統とは少くともそこに瑣少の相違せる處あるを見得る。尙彼大乘二十頌論に於て高調せらるゝ諸法緣起自性空なるに愚夫の虛妄分別よりして世界相の顯現せらるゝと説く唯心論的思想の如きが中論等の系統に於ては注意すべき程のものが見られないのであるが西藏譯に依る限り本論に於ては處々に此を見ることである。

四、本偈の漢譯については、一九二四年 Phil. Schaefer 氏が “Die 6) Sitze des Negativismus” と題してハイデルベルヒに於て此が獨逸譯を出版して居る。卷尾には縮藏に依る漢譯本の寫眞版及び西藏譯北京版赤字本即ち本稿に於て私が大谷大學圖書館より借覽したると同じ原本の寫眞版をも貼付したるにても見らるゝ如く、獨譯者は西藏譯を参照しつゝ漢譯本を獨譯した。詳細なる脚註を附しつゝ極めて讀むに困難な漢譯偈をとにかく理解せんと試みた力作であつて、現在まで一註釋すら傳らない漢譯本を讀む者に對する好箇の參考書である。

五、論偈はそれ自らにて理解さるべきものであらうけれども、此は固より容易の業ではなく、論偈に對し、その各偈の問題を指示し、各偈の脈絡を示すものは論偈に對する註釋である。現在の漢譯偈に於て上に記した様な多くの難點の存するもの或意味に於てはその論偈に對する註釋の背景に存せざりし爲でないかとも思ふ。而して本論偈には中論、七十空論を初め他の龍樹論偈に存する如き龍樹自らの疏は、コルデイエも注意する如くカタログには無畏註の次に位して示されてあるが現在の北京版藏經には存せないのであるから、註疏としては先に述べた月稱註を参照するより他ない。他の中觀論系論書の註に於て既に知らるゝ如く、此註釋によりて各偈の問題を指示し、前後の關係を明にするを得て、全體としての論書に對する方角が立ち得るのである。

本稿は専ら西藏譯本偈に依りつゝ、漢譯を参照し、月稱註の解釋する處によりて各偈の問題を理

解し、前後の關係を明にせんことを努めたものである。それが爲に、偈本の譯の間に、多少煩雜な嫌はあるが月稱註によりて多くの補意を挿入した。詳細な註釋の要點丈を摘取し、偈本と共に理解せうとした多少の無理からやむを得ずした處である。因みに本稿は前に言つた如く西藏譯を正依としたから漢譯の終の流通偈には關係して居ない。西藏譯本偈やその註釋にはなく、それによりて批判し行く便がないから、それに關係してたゞしても大した結果も得られないであらうから、此處は且らくシェツフェル氏の獨譯に委することにした。

(歸敬偈)

gan-gis skye dai hjiig-pa-dag || tshul hdi-yis-ni spais-gyur-pa ||  
 (1) rten-cin hbyun-ba gsunis-pa-yi || thub dhan de-la phyag-kshal-lo ||

歸命<sup>三</sup>三世寂默主 宣<sup>三</sup>說緣生<sup>ナル</sup>正法語 若<sup>了</sup>諸法離<sup>レ</sup>緣生<sup>ニ</sup> 所作法行如<sup>レ</sup>是離

〔諸法の〕生と壞とを此道理によりて斷ち、緣起を説き給へる彼牟尼の主に稽首禮す。

漢譯本には終に於ても流通偈と見らるゝものある如く、西藏譯本偈及び月稱所依の偈とは異つたる原本に依れるものであらうから、此歸敬偈も西藏所傳のものと異りたるものと想はれぬでもないが、同じ形の下に一行中に攝せられ、殊に歸敬の意味を表はさんとする此偈の下半が、前半とは獨

立して縁を離れて諸法生ずると云ふ縁起説を解了せざる者のことを述べるのが既に異であり、又後に屢出で來る此漢譯の價值から見れば、西藏譯前半に相應する如き原本が、かくの如く誤解せられたのでないかと思はれる。

「此道理」とは固より縁起を指示し、又は縁起が相互相待(ananyatāpekā)より成れるが故に生と壞を遮するその意味を指示するものとも註せられて居る。月稱註によれば空七十論と廻諍論とは論主が佛を讚嘆する此偈無く本論に於てこれあるは、前二論は中論の展開せるものでありて獨自の教儀無き故である。即ち廻諍論は「如諸法自性 不在於緣中 此無自性故 他性亦復無」(羅什譯)なる中論觀因緣品第二偈について、論難と答辯とを説かんが爲にそれより展開したること知られ、空七十論は「如幻亦如夢 如乾闥婆城 所說生住滅 其相亦如是」(什譯)なる有爲相品第三四偈に就いてそれより展開したること明かなるものであるが、本論は根本中論の如くこゝに主として縁起の觀察に従事せん爲であつて、中論の展開せる如きものでないのであると述べて五部論中に於ける本論の位地を認め、又自性、大自在天等の論者は自性、大自在天、士夫、時等より世間の生滅すること等を許し、一切を棄てることによりて涅槃城に行かんことを希ふも二諦を顛倒なく見ること害せられたる爲に長時を要するも涅槃に至らず。此縁起説、緣性こそは二諦を誤無く見ることを得るが故に涅槃に至る大道であり、此を説くが故に聲聞獨覺等の諸「牟尼の主」である佛に稽首禮す

と述ぶ。即ち語は異なるけれども中論の劈頭に於ける二行の歸敬偈即ち智度論の所謂諸法相偈と同じことを述べるものと月稱は見るのである。

(1) <sup>(1)</sup> gañ-dag-gi blo yod med-las || nram-par ḥdas-gñ mi-gnas-pa ||

<sup>(2)</sup> de-dag-gis-ni rkyen-gyi don || <sup>(3)</sup> zab-mo dmigs-med nram-par rtogs ||

(1) gañ blo yod dan med-pa-las ||,

(2) de-dag zab-mo dmigs med pañi ||, (3) rkyen-gyi don-la nram-par bsgom ||

離<sup>ニ</sup>有無<sup>二</sup>邊<sup>一</sup> 智者無<sup>ニ</sup>キ<sup>キ</sup>所依<sup>一</sup> 甚深無<sup>ニ</sup>キ<sup>キ</sup>所緣<sup>一</sup> 緣生、義成立

若し人、「宿世の修習力によりて」彼の智慧が有と無「を見ること」より超へ、「有と無との二邊以外に中無ければ有無を超へては所依住無と故に」住すること無きときは、彼等は「愚者の入る能はざる」甚深にして、「有無の邊と中とを分別する境としては」了得 (upalabdhi) せらるること、無き緣生の義を解了す。(一)

月稱註引用偈にてはその第四句の“nram-par bsgom”が「修習」(vibhāvanā)の意味であるが、それ故に月稱の註する如く「智慧によりて見證する (sākṣātkara)」である。本偈の“nram-par rtogs”も云ふもそれにて不可なることを無く、漢譯の「成立」は又 vibhāvanā に於ける manifestation; creation の意味を表はしたものであらう。

「縁生の義」に「*rikyen-gyi don*」の *rikyen* については固よりそのまゝ「縁生」の意味でないが、縁起 (*pratyasamutpāda*) を又 *pratyayatā* にて表はるれ、西藏譯にては此が「*rikyen-nid-pa*」又は「*rikyen-pa*」をも言はれる。今の「*rikyen*」を云ふも固より此意味であるから、月稱註に於ては此が「縁起の義」と語を換へて表はされて居る。

(2) <sup>(1)</sup> *re-shig ñes kun hbyun-bahi gnas* || <sup>(2)</sup> *med-nid nram-par bzlog-zin-gyis* ||

*rigs-pa gan-gis yod-nid dan* || <sup>(3)</sup> *bzlog-par hgyur-ba mñan-par gyis* ||

(1) *ñes-pa thams-cad*, (2) *med-pa*, (3) *yod-pa yan*, (4) *bya*

若謂「法無性」即生諸過失、智者應如理伺察法有性。

且らく「因果の關係を拒否して世出世の凡ての善根を破り、」凡ての過惡の起る依處なる無性は、「三世の縁起と衆生の共業によりて種々なる器世間の生ずることを建立する阿毘達磨中に」遮し畢れりと雖も、「有性を遮することは、「一切の器世間は虚誑の性質あるものなり。諸行は無常なり」云々とて世尊によりて説かれながら、一書に説かれざる爲に愚者等は永く有見に慣るゝが故に、彼牟尼主の教説に依つてその所説を此論中に攝集して」理 (*vikṛti*) を以て有をも亦遮すべければ、「汝等」問くべし。(二)

漢譯第四句の「法の有性を伺察 (*vicāra*) する」は中觀論書にては常に有性無性を吟味して自



性空を立することであるから、伺察法有性とは即ち西藏譯の所謂法の有性を遮することである。

(3) ji-ltar byis-pas rnam-brtags bshin || dños-po gal-te bden gyur-na ||  
(2) de dños-med-pas rnam-thar-du || gan-gis mi-hdod rgyu ci-shig ||  
(3)

(1) de-ste (ji-sic ?), (2) de-dag dños-med, (3) gan-phir, (4) de ci.

若有性實得 如<sub>二</sub>愚者分別<sub>一</sub> 無性即無因 解脫義何立

愚者の分別せる如く「の自性を以て青等の」有法、若し眞「にして顛倒なか」らんか、「彼等愚者は見らるゝ如き有法の眞性を見るが故に、阿羅漢の如く」彼等は無法に「して後有生するなく無取に般涅槃」して解脫すと「許すべし。而も愚者はその分別せる如く決定せられざる故にかく」許されざるはこれ云何なる因(理由)によるか。(三二)

漢譯を獨譯者は「愚者の如く諸法を實有と了得するならば、所謂諸法無自性と云ふことは理由なきことになるから解脫と云ふことは云何にして立せられ得るか」との意味に解するのであるが、西藏所傳の如くに解するならば、「實なりと了得するものは見諦せるものであるから、修道の因無くして無性即ち無取に般涅槃することになる。爾るときには解脫の意味が云何に論立せられるのであらうか」との意味になる。

月稱は本偈々前に於て、前第二偈に「理を以て有を遮す」云々と述べたその「理」を示さん爲である

と述べて本偈を掲げる。その「理」を正しく述べるものは本偈であるが併し意味は次の第四偈にも續いて居る。

(4) yod-pas rnam-par ni-grol-te || med-pas srid-pa hdi-las nin ||

dhos dai dhos-med yons-ges-pas || bdag-'ñid chen-po rnam-par grol ||

不可説<sub>二</sub>有性<sub>一</sub>、不可説<sub>二</sub>無性<sub>一</sub>、了<sub>二</sub>知性無性<sub>一</sub>、大智如<sub>レ</sub>理説

有〔見〕によりては解脱せず。無〔見〕は一切過惡の出生處なる故にそれ〕によりては此有 (bhava) より超出するにあらず。「爾らば何れの見によりて解脱するか、曰く」大徳ある人は有無を「誤無く」遍知〔して、有に緣らずしては無なく無に緣らずしては有は立せられざる故に有無の二は自性としてあり得べからずと有無の自性を分別すること無き無緣 (anāmbana) の智に住〕する故に、「三界繫屬の因なる有無の相を分別するより起る貪等の相續斷絶して」解脱す。(四)  
漢譯は本偈が解脱云々に關するものと見ずして有と説き無と説くことは如理ならずと見るものである。

(5) de-'ñid na-mthoñ hji-g-rten dai || mya-'ñan hda-s-par riom-sems te ||

de-'ñid gzi-gs rnam-s hji-g-rten dai || mya-'ñan hda-s-par riom-sems med ||

(1) yan-dag, (2) yan-dag mthoñ-bas.

涅槃與<sub>三</sub>生死<sub>一</sub> 勿<sub>レ</sub>觀<sub>三</sub>別異性<sub>一</sub> 非<sub>三</sub>涅槃生死<sub>一</sub> 二性有<sub>三</sub>差別<sub>一</sub>

實を見ざる人は「生死と云ふ」世間と「彼生死の終息と云ふ」涅槃と「は所對治法と對治法として住し、一は捨てらるべく一の取らるべきを」慢マダカに思ふ。されど實を見る人は世間と涅槃とを慢に思ふこと無し。(五)

本偈は、生死は五取蘊を自性とせる故に有法であり、涅槃は生死の滅盡を自性とせる故に無法であり、その生死と涅槃とある故に有無も存すると云ふ異解者に對して、生死と涅槃との二有るときは有法無法も有るであらうが、生死と涅槃との二は愚者が無始の生死に於て有法を見ることに慣れて居るから、その對治として生死の終息する相なる涅槃を説かなければ有愛を除くこと不可能なる故に愚者の所分別に相待して説かれたるものなれば有無の二者ありとは説くべからざるを示すのである。

(6) srid-pa dan-ni mya-nan ḥdas ḥ gñis-po ḥdi-ni yod ma-yin ḥ

srid-pa yoñs-su ges-pa riḍḍ ḥ mya-nan ḥdas shes-bya-bar brijod ḥ

(1) de-gñis yod-pa ma-yin-no ḥ, (2) ni, (3) shes brijod-pa yin ḥ

生死及涅槃 二俱無<sub>三</sub>所有<sub>一</sub> 若了<sub>三</sub>知生死<sub>一</sub> 此卽是涅槃

〔五取蘊なる〕有 (bhava) 〔は緣起の故に影像の如く自性無く〕及び〔それら五取蘊なきときはそれ

の無法なる「涅槃」も實に無き故に、「此」は有るにあらず。「若し涅槃が畢竟じて無なるとき、それは云何にして得らると立せらるべきか。曰く。彼「有」の自性無生なる」を「非遍知 (aparijñā) の相にて」遍知するは、「一切相 (sarvalakṣaṇa) 寂滅する體なる故に言説諦と相關係して」涅槃を稱せらるゝなり。(六)

(7) dnos-po byun-ba shig-pa-la || ji-ltar hzog-par brtag-pa bshin ||

(2) de-bshin dam-pa rnam-skyis kyañ || sgyu-ma byas-paḥi hzog-pa bshed ||

(1) skyes-pa (2) de-bshin sgyu-ma byas-pa ltaḥ || mkhas-pa-dag-gis hzog-par dgonis ||

破<sub>二</sub>彼生有性<sub>一</sub>、分<sub>二</sub>別滅<sub>一</sub>亦然 如<sub>二</sub>幻所作事<sub>一</sub>。滅現前無<sub>レ</sub>實

生じたる法の壞せる處に滅と分別せら「れ、法の無となれるによりて立せらるゝが故に自性として立せられたるもの無し。即ち有 (astivā) の壞は法に囚らずしては見られざ」る如く、その如く尊き人 (sat) 等も亦「滅を云ふ自性として起れるものを了せずして、「幻所作」の「物の如く自性無き法に因りて涅槃・滅を意趣するなり。(七)

(8) rnam-par hjiḡ-pas hzog hgyur-gyi || ḥdus-byas yoñs-su ges-pas min ||

de-ni su-la mñon-sun hgyur || shig ges-pa de ji-ltar hgyur ||

(1) ges-pas ma-yin-na, (2) ji-ltar-bu,

若滅<sup>シ</sup>有<sup>ニ</sup>アル所壞<sup>ニ</sup> 知<sup>ニ</sup>彼是有爲<sup>ニ</sup> 現法<sup>スラ</sup>尙無<sup>レ</sup>得 復何知<sup>ニ</sup>壞法<sup>ニ</sup>

若し「色等の法の自性」破壊「し、彼れ業煩惱の因縁を具せざるによりて後に生ぜざること」が滅  
 「涅槃」にして、有爲の遍知によるにあらず「と云はゞ、爾らず。何故なれば眞實を見るによりて滅  
 は現前せらるべきに、かくの如き滅は蘊の滅せざる時には無し。已に滅したるときには誰も無けれ  
 ば」彼「滅」は誰に於て現前 (pratyakṣa) せらるべきか。「現前即ち」壞「滅」を知るとは是れ何事なる  
 か。(八)

漢譯者の原本には上半偈に於て遍知に關する否定詞を缺きたる爲にその第二句が第六偈の第三句  
 と同意味なることを了知するを得ずして、單に「諸行無常是生滅法」等の様なる意味となり、後半偈  
 は、此「是生滅法」の眞理が解了し易からざるを示すこととなる。後半偈の「現前」など西藏所傳との  
 相異も殊に甚だしい、即ち西藏所傳の第四句は、現前とは苦の滅を知ることであるが、所謂「滅」が  
 無なるに於ては苦の止息する相の餘習すらないからそこに滅を知る現前のあるべきでなく、苦不生  
 と知ることが現前であるとなす意である。

(9) gal-te phub-po ma-ḥgags-na || ñon-mois zad kyah ḥdas ni-ḥgyur ||

gan-tshe ḥdir-ni ḥgags-gyur-pa || de-yi tshe-na grol-bar ḥgyur ||

(1) de-yi de ḥgag-pa.

彼諸蘊不滅 染盡即涅槃 若了知滅性 彼即得解脱

若し蘊〔現在時に〕滅せざる時は煩惱盡くるとも涅槃にあらず。「諸蘊」こゝに滅したる時解脱を成す。(九)

此偈は前偈と同じく滅涅槃を無と考へることを破するのであるが、月稱註によれば、彼涅槃の境地を言ふ時の「生は盡きぬ、梵行は成就せり」云々の「生は盡きぬ」とは現在時に苦蘊の不生を了知するを云ひ、五取蘊が未來時に無となるの意味でない。若し未來時に無となり、現在時に蘊の滅即ち不生を了知すること無きときには、現在に煩惱が盡くとも涅槃に非ることゝなるとして始二句の意味を解釋し、次に「有餘依、無餘依の二種涅槃中、有餘依涅槃は蘊殘る故に貪等を捨つとも涅槃と許さず、即ち無餘依なる蘊の相續絶無する未來時を涅槃となす」との異論に對し、苦蘊の不生を了知することが涅槃でないならば貪等の縛を斷ちて煩惱なくとも有餘依涅槃にては身見等の因の現在せるを緣じ、それを緣するによりて貪等を生ぜしむる故に解脱を得ることもあらず。故に無餘依涅槃にて「諸蘊そこに滅したる時解脱を得る」と云ひ得られないことになる。異論の過失を述べつゝ後半偈を解釋して居る。乃ち後半偈の當意は未來時の無が涅槃解脱たるものでなく、滅即ち苦蘊不生を知るときに解脱が得らるゝとなすのである。漢譯の「若了知滅性 彼即得解脱」とは良く原意を汲んで譯されたものと見ることが出来るが、漢譯の第二句「染盡即涅槃」とは原文に於て否定詞の認めら

れざりしものにして「卽」は「非」でなければならぬ。

(10) ma-rig rkyen-gyis byun-ba-la || yan-dag ye-ges-kyis gziḡs-na ||<sup>(1)</sup>

skye-ba dah-ni ḡgags-pahaḡ ruḡ || ḡgaḡ yan dmiḡs-par mi-ḡgyur-ro ||<sup>(2)</sup><sup>(3)</sup>

(11) de-nid mthoḡ-chos mya-nan-las || ḡdas-ḡin bya-ba byas-pahaḡ yin ||<sup>(4)</sup>

(1) ges-pas rnam-brtags-na. (2) ḡgas. (3) gaḡ.

(4) mthoḡ-baḡi chos-la mya-nan ḡdas || bya-ba byas-pahaḡ de-nid-do ||

若生法滅法 二俱不可得 正智所<sup>ニ</sup>觀<sup>ス</sup>察<sup>ス</sup> 從<sup>ニ</sup>無明緣<sup>一</sup>生<sup>ト</sup>

若見法寂靜 諸所作亦然

無明の緣によりて起れる〔行等の、無明に因待 (apekḡḡ) せる故に、緣の種別 (viḡeḡa) を具して眼翳者の見る髮等の如く自性無なる〕を、〔眼翳無き人の如く〕正智を以て觀察するときは〔かくの如き行等の〕生も亦滅も何等得られず。(一〇)

〔此緣起の生滅不可得の智の時〕彼時こそは見法中に涅槃し又〔見法に於て〕所作成辨せるなり。(一前半)

前偈に至るまでは有自性論者が有無の觀念の下に於ては涅槃の有り得べからざるを示し、今偈は空觀論者に解脱の有り得らるゝを述べたるものである。漢譯に於ては此一行半の偈にかゝる意味の

連絡あることが十分表はれてなり。

(1) *grā-te chos-gces mzung-thogs-su || hūi-la bye-brag yod-na-ni ||*

(12) *dhos-po yin-tu phra-ba-lāhān || gān-gis skye-bar rnam-par brtags-pa ||*  
*rnam-par mi-mkhas de-yis-ni || rkyen-las byun-bāhi don ma-nthor ||*

(1) *chos-gces de-yi hōg-tu-ni ||*, (2) *dbye-yod-na*,

(3) *yin-tu phra-bāhi dhos-la yān ||*.

知<sub>二</sub>此最勝法<sub>一</sub> 獲法智無邊

緣生不可見 是義非無見 此中微妙性 非緣生分別

法を知る「四諦現觀の見道十五刹那」の次後に、若しこゝに特異「に分別せらるべき相なる第十六相」なるものあるときは、「かゝる、未だ判決せられざるものを更に判決せざるべからざるに至る。故に」微細なる物に於ても猶「自性として」生を分別する無智なる人は緣生の義を見ざるなり。(一一の後半及び一二)

月稱註の解釋する處によるに、「法を知る」とは所謂前偈の現法中に於ける涅槃について言はれるものなのであるが、その法を知る即ち緣起を知るとは四諦の現觀にして、緣起の故に苦の不生不滅を知る苦諦の遍知より、道諦も緣起の故に不生不滅を知るに至るまでは、一刹那に緣起を見るのであ



る。そこで所謂見道十五刹那と云ふも固より一現觀であつて所化の衆生を利益する爲に十五に分ちたるまでである。故に道を修習する第十六相も解脱を希ふ者をして別な相の道によりて眞實を知る行に習はしめん爲に分別安立したのであつて實は緣起を知る一相のみである。若し第十六心なる別相、異知によりて知らるべき異法があるとすれば、その所縁を分別してその自體を別に判決せねばならぬと云ふことになるから、かくの如く凡ての法を別々に自性として立せんとする人は、微細なる法に於ても自性としての生を分別し、自性として無生、一味なる緣起の義を知らない。故に緣起の義を一相として見るべきであつて、見道十五心、第十六心等の別性を認許すべきでない。無生一味なる緣起の義を了知するとき現法中に涅槃すと立せらるゝとなすものである。

漢譯は第十二偈に於ておぼろげながらこゝに解釋せんとする如き意味を傳へるが前項に於けると同じく第十一偈後半と第十二偈との聯絡をかく見ることは出來ぬ。

(13) non-moñs zad-paḥi dge-slon-gi || gal-te ḥlchor-ba nann-ldog-na ||

<sup>(2)</sup> ci-phyir rdsogs-saṅs-rgyas nams-kyis || de-ri rtson-pa nann mi-bḡad ||

(1) ḥlchor-ba gal-te nann-zlog-na ||, (2) rdsogs-paḥi saṅs-rgyas nams-kyis-kyan || ci-phyir de-yi rtson mi-bḡad ||

佛正覺所說 有說非無因 若盡煩惱源 卽破輪廻相

煩惱滅盡したる比丘には「生死の因縁を具せざるが故に無始より展轉せる」生死「の相續」に若し止息す「と云ふ」ならば、何故に等覺者は彼「生死の相續」の始を「も終の如く」説き給はざりしか。

(一一三)

蘊の相續止滅するを涅槃なりとする説に對し蘊の相續の終を許すならば始をも許さねばならぬ過失に墮することを説くものである。

漢譯は「佛の説法には何れもその説法せらるべき因由があるのであるから、「その所説の如く」煩惱を盡すならば生死を破する」との意味であらうから此はこの所説と何等の關係もないことを述べたことになる。漢譯者には此等數偈に亘る一脈の思想が西藏所傳の如くには理解されて居なかつたものと思はれる。

(14) *rtson-pa yod-na hies-par yan || Ita-bar gyur-ba yohs-su hdsin ||*  
*rten-cin hbrei-par hbyun-ba gan || de-la snon dan tha-ma ci ||*

(1) *gan hbyun-ba.*

諸法決定行 見ニ有作有<sub>レ</sub>取 前後際云何 從<sub>レ</sub>緣所ニ安立<sub>一</sub>

始むること (ārambha) あるときは「生死に初 (agra) 有るものとなる。初有るときは無因論を許す故に」決定して「邪」見となれるものを執するなり。緣起「自性として不生なりと許すところ」には

初及び終とは何ものなるか。(一四)

先づ生死相續の有始見を破する有始空を説き、前偈の所説を承けて有始有終見を破すること、中論觀本際品第十一等に見らるゝ思想である。夫故に漢譯の前半偈には「決定、見、作(始作、ārambha)取」等の如き原文に於て西藏譯のそれと同形なりしことが略認められながら、獨譯者が辛ふじて「決定行」を「決定して存在する」の意味に解して上本文に訓讀したる如く讀まれるに過ぎざる状態であつて、西藏所傳の意味とは隔りがある。後半偈は、前後際と云ふも諸法緣起の上に立せられることを言はんとするのであるから結局の意味は此處の所論と一であるが、今は假の前後を安立する點よりも實の前後を否む點を主眼とするものであるから此亦充全なるものとは見られない。

(15) *shon skyes-pa-ni ji-kar-na* || *phyi-nas slar yan bzlog-par hgyur* ||

*shon dai phyi-mahi mltah bral-ba* || *ngro-ba sgyu-na bshin-du snan* ||

(1) *ji-ta-bur*, (2) *rab-tu ldog-par hgyur*, (3) *spas-pas*.

云何前已生 彼後復別轉 故前後邊際 如三世幻一所見

先に「自性を以て」生じたるものは「自性には變異 (anyathātra) 無き故に常性なれば」云何でか後に復止滅することあるべき。「それぞ前偈所述の如く緣起は自性不生なるによりて」前後の際を離れ趣 (gati) は「妄取の性にして」幻の如くに見らるゝものなり。(一五)

漢譯の後半偈は又前偈のその如く前後際を安立するの說相を取つて居る。第二句の復別轉の轉は獨逸譯者が轉變、變異の意味に解したる如くであつて、此は *nivṛtti* の原語なるを忘るべからず。固よりかゝることの有り得べきではないけれども此が玄奘の所謂「轉」(*pravṛtti*) に讀まれるならば意味が正反對になる。

(16) *gani-tshe sgyu-ma hbyun she ham* || *gani-tshe hjiḡ-par hgyur śān-du* ||

*sgyu-ma ges-pa der mir-moṅs* || *sgyu-ma ni-ges yohs-su sred* ||

(1) *gani-gi tshena hjiḡ hgyur shes* ||, (2) *skom*

云何幻可生 云何有所著、癡者於幻中、求幻而爲實

何時幻は起り、何時幻は壞するかと、幻を知る「幻術」者は「幻が實ならざるにかく現はるゝを知る故に」それに迷はず。幻を知らざる者は「それに」愛著す。(一六)

月稱は本偈が、法の相に暗き者には邪に現はるゝその妄取(*moṣa*)性を説かんが爲であると述ぶ。問題は前偈より引續き蘊相續の始と終とに執著するを破するものであるから、漢譯の「云何」にては前後の時に關する問題について述ぶるものとして十分でない。況んや第二句の如き上來よりの蘊の相續止息の問題を論ずることを忘れたるものである。西藏譯に於ける第三句に相當するものは漢譯に於て此を缺く。是れ或はその第三句と同様の意味が次の第一七偈に於て述べられたるによるので

もあらうか。

(17) srid-pa smig-rgyu sgyu hdra-bar || blo-yis mthoh-bar gyu-pa-ni ||<sup>(1)</sup>

shon-gyi mthah hām phyi-mahi mthah || ka-bas yon-su slad mi-hgyur ||

(1) na, (2) mthar.

前際非<sub>二</sub>後際<sub>一</sub> 執<sub>レ</sub>見故不<sub>レ</sub>捨 智觀<sub>二</sub>性無性<sub>一</sub> 如<sub>二</sub>幻燄影像<sub>一</sub>

「觀行者 (yogin) が有(有爲)を陽燄と幻との如く「正」慧 (mati) を以て見るとき、「勝義の自性を縁せざるか故に、法の自性に於て」前際、又は後際を「見る」見によりて雜穢せられず。(一七)

獨譯者も云ふ如く漢譯は何れにしてもこの思想の無理解を表はして居るが、「前際非後際」と云ふ「非」を「又或」等の語に變へるならば、「愚者は前際又は後際の見に執著してそれを捨てず。智者は性無性を觀すること幻燄等の如し」と幾等か妥當な意味に讀み得る。「非」を翻譯以後に於ける誤寫より來るものとしてかく解しては云何。

(18) gain-dag-gis-ni hdus-byas-la || skye dan hñg-pa nam-brtags-pa ||<sup>(1)</sup>

de-dag rten-hbyun hkhor-lo-yis || hgro-ba rnam-par mi-ces-so ||<sup>(2)</sup>

(1) hñg-par, (2) gin-tu.

若謂<sub>二</sub>生非滅<sub>一</sub> 是有爲分別 而彼緣生輪 隨轉無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>現

若し人〔自相 (svataksaria) 生じ自相滅すと〕有爲に於て、生滅を分別することあらんか、彼等は縁起の輪の「前と中と後とを離れ、旋火輪の轉する如くなる」世間 (jagat) 「の起る」を知らざるなり。(一八)

漢譯の第一句「若謂生非滅」の「非」に關しては前偈のそれと同様の解釋を施し度い。かく解するならば「若し生滅と云ふ、是れ有爲に關しての分別ならんも、而も彼の如き分別の前には縁生の輪の隨轉して前中後際を離れたる相が示現すること無し」と略迎へて此處の所論に關係せしめて理解せられ得るからである。

(19) de-dan de brten gan byun de || rañ-gi dños-por śkyes ma-yin ||

<sup>(3)</sup> rañ-gi dños-por gañ ma-skyes || de-ni sbye shes ji-ltar bya ||

(1) ba, (2) rañ-bshin-du-ni de ma-skyes, (3) rañ-bshin-du-ni, (4) ji-skad.

若已生未生 彼自性無<sub>レ</sub>生 若自性無<sub>レ</sub>生 生名云何得

彼彼「の縁」に縁りて起つたるもの、は彼れ自體として「先には無なるものなれば、彼」生は「影像の如く自體として」あるはあらず。自體としての生に非るものは云何で生と稱せらるべき。(一九) 上來涅槃を相續の斷絶とする見の破析より前際後際の不可得を述べ、今偈以降に於てはその同じき問題を生滅の問題として此を論ずる。今偈はその生を觀察し次偈にはその滅を論ずる。

漢譯第二句以下は可なり。第一句も生を論ずるものなればそれを已生未生の二に辯別して考察すること中論等に於ける常の論法であるから是亦不可なるではないが、その生不可得は縁起の故であると謂はんとするのが本偈の所謂論理的基礎であるから此を失したるは宜しくない。

(20) rgyu zad-mid-las shi-ba-ni || zad ces-dya-dar rlogs-pa ste ||<sup>(2)</sup>

rai-bshin-gyis-ni gain ma-zad || de-la zad ces ji-ltar brjod ||<sup>(3)</sup>

(1) zad-pa-yi, (2) mñon-pa, (3) du-ni, (4) ji-skud.

因寂卽法盡 此盡不可得 若自性無盡 盡名云何立

因盡きたるによりて〔法〕寂滅〔し〕涅槃〔するは〕世間に於て〔盡〕寂滅と解せらる。かく〔法の住する縁無きものに盡くるは住の縁無なるに縁るものなれば彼盡は自性として成立すること無しと知らるゝが故に〕若し自性として盡無きものは云何にして盡〔の語〕は語らるべきか。(二一〇)

「若し自性として盡あるときはその盡は縁によらず、因の盡るによりて盡るにあらず。故に業と煩惱との法の無くなるを待たずしても涅槃することとなり、努力無くして涅槃することとなる」と此は月稱が後半偈の餘意として補釋する處である。

(21) de-rtar ci yan skye-ba med || ci yan ñgag-par mi-ñgyur-ro ||<sup>(1)</sup>

skye-ba dani-ni ñjig-pahi lann || dgos-pahi don-du bstran-paho ||

(1) gan yan,

無<sub>二</sub>少法可<sub>レ</sub>生 無<sub>二</sub>少法可<sub>レ</sub>滅 彼生滅<sub>二</sub>道 隨<sub>レ</sub>事隨<sub>レ</sub>義現

上述の如く「生滅は自性をして無き故に智者が縁起の如く見、理によりて伺察するとき」生は毫もなく滅も鎖少だも無し。「かく生滅の二無なるに世尊の「諸行は無常なり、生じ壞する性質あるものなり」と示されたる」を生と滅との道は「或る」用 (prayojana 目的) の爲に説かれたるなり。(二二)

(22) skye-ba ges-pas hjiḡ-pa ges || hjiḡ-pa ges-pas mi-rtag ges ||

mi-rtag-nīd-la hjiḡ ges-pas || dan-pahi chos kyani rtogs-par hgyur ||

(1) des-na.

知<sub>レ</sub>生即知<sub>レ</sub>滅 知<sub>レ</sub>滅知<sub>二</sub>無常<sub>一</sub> 無常性若知 不<sub>レ</sub>得<sub>二</sub>諸法底<sub>一</sub>

「生滅二道の説かれたる目的は曰く「生を知るによりて滅を知り「生は滅の本となれるが故に」、滅を知るによりて無常を知り「滅と無常とは一物と知らるゝ故に」、無常性に入り「無常を」知るによりて「火宅に入る時の如く必ずそれより脱れんと欲ふによりて」又正法をも解了すべし。(二二)

漢譯の第四句「不得諸底」の「不」は獨譯者も指摘する如く漢譯者の誤謬である。

月稱註引用偈は第四句に於て「正法 (saddharma) を解了する」の正の字無く「夫故に法を解了す」この意であるが、此は註釋に於ても「無常に入る時はそれより脱れんとして出離 (nāryāṅika) とな



れる不生不滅なる緣起の法性を解了するときは、夫れよりして最上甚深涅槃と云ふ法を了悟す」と述べて、「正 (tad)」に相應すものを見ない。尤も「最上甚深」等の形容詞はあるが月稱註の如き、かかる場合には普通それらの他に「正」なる辭の重ねられてあるべきであらう。又本偈の「正法」とは最上甚深涅槃よりも寧ろその次上の「緣起の法性」を意味すべきと思はるゝから、その註の文勢より見ても「正」の字は此月稱註には無く、それが「夫故に (tad)」であつたであらねばならぬ。私は梵文古寫本の校訂に關する知識に極めて乏しいのであるが、此は本偈原典に於ける ‘taddharma’ が月稱註原典に於ては “saddharma” なりしことを想はしむる。

(23) gañ-dag rten-cin h̄brel h̄byun-ba || skye dai h̄jig-pa nann-spans-par || <sup>(2)</sup>

yes-par gyur-pa de-dag-ni || lta-gyur srid-pahi rgya-mtsho brgal || <sup>(3)</sup>

(1) h̄brel-par h̄byun, (2) pa, (3) lta.

諸法從緣生 雖生即離滅 如到彼岸者 即見大海事

若し人「かくの如く最上慧を具して生滅を觀察しつゝ」緣起の生滅を離れたる「想」を知るに到らんか、彼等は見となれる(見の水滿つる)有(Dhava)の海を已に度りたり。(二二三)

「見」を超え見の止滅する相を月稱註して、「生無き故に法 (Dhava) を見ることを無く、滅無き故に斷見無し。生滅無きときは自相無き故に常見起らず」と。

漢譯の第二句に對し獨譯者は「生すと雖も生滅を離れたり」と「生」字を一字加へて讀んで居るが、此は先の第一七、一八偈の「非」字に對して考へたる如く「雖生」の「雖」が「離」の字の誤寫せられて現形を取れるに非るかと思ふ。かくして此漢譯偈は「諸法縁より生じ、生滅を離れたりと、もし「かくの如く」彼岸に到れる者は大海の事を見る」と讀むべきでないか。第四句の「見大海事」を西藏文の如く讀みては一文の意味不明となるから前上の如く讀まれることになるが夫故に漢譯者の原文の「見」に對する讀方に誤あることが知られる。

(24) <sup>(1)</sup> so-so s<sup>(2)</sup>kye-bo dnos bdag-can || yod dai med-par phyin ci log ||

<sup>(3)</sup>ñes-pas ñon-moñis dbai-gyur rñams || rai-gi sems-kyis bslus-par ñgyur ||

(1) so-soñ, (2) pa.

若自心不レ了 異生執ニスルハ我性ナ 性無性ト顛倒シテ 卽生ニ諸過失一

「空を見て恐れ、生滅の二邊を離れたる縁起を解了せざる」異生 (pithogjana) の、法 (bhāva) に我有り「と執じ」、有と無とに於て顛倒する「自分の分別によりて生じたる」過失よりして煩惱に心制せられたる者等は、「諸法の眞性を見ること覆はれ、顛倒にて増益せるが故に」自心によりて劫奪せらるゝなり。(二四)

(25) dnos-la mkhas-pa rñams-kyis-ni || dnos-po ni-rtag bslu-bahi chos ||

gsog' dan ston-pa bdag' med-pa || rnam-par d'en shes-bya-bar mthon ||

(1) dhen-par rab-tu mthon.

諸法は無常 苦空及無我 此中見<sub>二</sub>法離<sub>一</sub> 智觀<sub>二</sub>性無性<sub>一</sub>

「それぞ空説を深坑の如く思惟せず、此は法の勝義なりと知り、劫奪心に於て劫奪性を正解する」諸法に通達したる人々等は「有爲」法を、「刹那滅の故に」無常、「自性なきに愚者には自性ある如く見らるゝ故に幻の如く」劫奪の性質あり、「自ら住する力無く自性としては弱き」集まれるもの、「自性無き」空、無我、離なりと見る。(二五)

「離」は月稱註に於て「空」又は「無垢」等を解せられて居る。

漢譯の第四句は勿論西藏譯の第一句に相當すべきものである。「性」は怖らく dnos-po (bhāva) をかく讀んだのであらうが「無性」は漢譯者の隨意に挿入したものであつて「法」を「性無性」と見て畢ふことは此處では宜しくないのであるが若し強いてそのまゝ理解せんとならば、第三句の「見<sub>二</sub>法<sub>一</sub>、離<sub>一</sub>」と同様のことを述ぶるものと見て獨譯者の如く「法(性)を自性無しと觀ず」と讀むべきであらう。

(26) gnas med dmigs-pa yod ma-yin || rtsa-ba med-cin gnas-pa med ||

ma-rig rgyu-las gin-tu byun || thog-ma dbus mthah rnam-par spans ||

(27) chu-gin bshin-cu sñim-po med || dri-zaji groñ-khyer htra-ba ste ||

rmois-pahi groi-khyer mi-bzad-pahi || hgro-ba sgyu-na bshin-du snai ||

(1) pa,

無<sub>レ</sub>住無<sub>二</sub>所緣<sub>一</sub> 無<sub>レ</sub>根亦不<sub>レ</sub>立 從<sub>二</sub>無明種<sub>一</sub>生 離<sub>二</sub>初中後際<sub>一</sub>

癡闇大惡成 如<sub>二</sub>芭蕉<sub>一</sub>不<sub>レ</sub>實 如<sub>二</sub>乾闥婆城<sub>一</sub> 皆世幻所見

〔世間は〕所住無く、〔緣るべき〕所緣有るにあらず、〔生の因の主質なる〕根無く、〔生じたるもの〕住せしむるもの (sthāpaka) 無し。〔故に世間は成立すること無し。世間無きときは彼世間の自相なる種々相あるにあらず。故に愚者の種々相を見るは〕無明の因より起りたるものにして〔夫故に世間は自性として成立したる無し。されば〕初、中、後〔即ち生、住、滅〕と離れたり。(二六)

〔又世間は無明の因より起りたる故に〕芭蕉の如く實無く又乾闥婆城の如し。〔かく世間は自性無なる故に〕癡暗の域なる堪<sub>レ</sub>難き世間は、幻の如くに見ゆるものなり。(二七)

第二六偈の第四句 “gnas-pa” が “gnas-par byed-pa = sthāpaka” なることは月稱註に「此によりて住せしむるは〔偈に云ふ〕住 (gnas-pa) なり。それによりて生じたるもの住するが故なり」の註に依る。第二七偈の「堪<sub>レ</sub>難き世間」とは又同註に「害を作し、息め難く、又暗に覆はるによりて自相了知し難き故に、堪<sub>レ</sub>え難き世間と云ふ。呼吸を出すこと無きの處、怖畏せしむるとの語なり」云々と云ふ。

此二偈は云ふ迄もなく前偈の「諸法に通達せる人」の所觀の内容の縷説にして、「法性を理と相應して解了し、理の如く説の時には」かく説かるゝのであるとなして居る。

(28) tshais sogs <sup>(1)</sup> hjiḡ-rtēn hdi-la-ni || bden-par rab-tu gaṅ snān-ba || <sup>(2)</sup>

<sup>(3)</sup> de-ni hphags-la rdsun shes gsun̄s || hdi-las gshan lta ci-shig lus || <sup>(4)</sup>

(1) la-sogs-pa hjiḡ-rtēn hdi, (2) brjod-pa,

(3) hphags-la de yaṅ brdsun, (4) de-las gshan-ni.

此界梵王<sup>チ</sup>初<sup>トセルヲ</sup> 佛如<sup>レ</sup>實正説<sup>ク</sup> 後諸聖無<sup>レ</sup>妄 説<sup>ク</sup>亦無<sup>レ</sup>差別<sup>一</sup>

「根境を超わたる物を知る時の量 (pramāṇa) たる」梵を初めとし、此世間に於て實 (satya) と見らるゝ「諸法の自性」も、聖者等に於ては尙是れ虚誑なりと記かれたり。「有爲は虚誑奴取の法なれば」此「疑無く虚誑なるもの」より他に何ものか残らん。(二八)

月稱註には「幻の如くに非るもの何かあらんや」との言外の餘意 (vākya-gaṅgā) を補言して居る。本偈は勿論前偈より續いて「世間自性求立なし」を述べるものであるが漢譯にてはその用語のみを少し宛拾いながら本偈の趣意は遂に見られない。

(29) hjiḡ-rtēn ma-rig ldon̄s gyur-pa || sred-pa <sup>(1)</sup> rgyun-gyi rjes-hbras dan̄ ||

<sup>(2)</sup> mkhas-pa sred-pa dan̄ bral-ba || dge-ba rnam-s-lta ga-la mñam ||

(1) pahi, (2) sred dan bral-ba-yi.

世間、癡<sup>レ</sup>所<sup>レ</sup>闇 愛相續<sup>レ</sup>流轉<sup>レ</sup>、智者、了<sup>レ</sup>諸愛<sup>一</sup> 而<sup>モ</sup>平等<sup>ニ</sup>善說<sup>ス</sup> スルヤ

〔若し此に異りて梵等の世間と智者との等しく見らるゝことあり得べからず。何故なれば〕無明によりて〔智眼〕盲ひられ、愛の相續に隨順せる〔梵王を初とせる此〕世間と、愛と離れ、〔正法甘露の水を飲みて願樂満足し、法を性質とせる〕善き智者とは云何で等しき。(二一九)

(30) de-nid tshol-la thog-mar-ni || thams-ced yod ces brjod-par bya ||

don nman rloggs-yin chags-med-la || <sup>(1)</sup>phyi-ni <sup>(2)</sup>nman-par dben-paho ||

(1) med-nas, (2) de-yi hog-tu dben-paho.

初說<sup>ニ</sup>諸法有<sup>一</sup> 於<sup>レ</sup>有求<sup>ニ</sup>實性<sup>一</sup> 後求<sup>レ</sup>性亦無 卽無<sup>レ</sup>者性離

〔法に執著を有し法の〕自相を〔分別することを〕求むる人の爲には〔彼等の所欲の對境を示して〕初めに〔五蘊十二處、十八界なる〕一切は有りと説かざるべからず。〔かくして彼等が〕物 (artha) を解了して〔有爲の法相に厭離心生じ〕執著無きに至るや、その次に離〔自性空に入る〕なり。(三〇)

見らるゝ如く本偈は、諸法空にして世間幻の如く虚誑なるに、世尊が此眞理を説かずして蘊處界ありと眞に非ることを説かれたるその所以を説明して、眞理と雖も必要なときは説かず、虚誑と雖も必要あるときは此を説くべく、此處には第一義に入る方便として必要ある爲に蘊處界等の眞に

非るものも説かれたることを示すものにして、こは彼中論觀法品第十八に「一切實非實 亦實亦非實 非實非非實 是名諸佛法」とて第一義諦は心行止滅の境なるも此に入る爲の説法の次第として述べられたるもの、或は又智度論卷一に「世界、各々爲人、對治、第一義の四種悉檀」として説かれたるものとその意味同じ。而して以下第三三偈まで同様の所述を見る。

(31) man-par dben don mi-ges-ia || thos-pa-tsam-ia hjug byed cin ||

<sup>(1)</sup> gan-dag bsod-nams mi-byed-pa || skeye-bu tha-gal de-dag brlag ||

(1) gan nams.

若不<sup>レ</sup>知<sup>二</sup>離義<sup>一</sup> 隨<sup>レ</sup>聞即有<sup>レ</sup>著 而所作福業<sup>ナ</sup> 凡愚者自<sup>ラ</sup>破<sup>ス</sup>

「然るにかくの如く」離(自性空)の義を知らず、「徒、空の聲を」聞くことのみに入りて、「空なれば此を行すとも何をかせんとて」福德を作さざる暴悪なる人々は、「翼の未だ生ぜざる鳥の己が巢を捨て、飛ぶ如く自ら」破らるべきなり。(三二)

即ち前偈所述の如き次第を取らざる時は、眞俗二諦の説立と相違することになる故に空を説く時邪に墮することを述べるものである。

漢譯文を獨譯者はそのまゝに讀みたること右に訓點したる如くである。然し西藏譯二本に依る限り本偈の云はんとする所は、空教學が單なる破斥に終る邪見にあらずして空の空たる所以が萬善福

徳の完成にあることを云ふ彼智度論卷十八(往一、一一五、b)所述「眞實人と邪見人との相違」に相應するものであつて、此意味を闡明ならしめん爲には云何にしても本偈の第三、四句に於て福德を作さざることの過失を言はねばならぬのであるから、漢譯第三句の「而所作福德業」には作を否定する否定詞があらねばならぬと思ふ。漢譯者依用の原本にはそれが缺けて居たのであらうか。

(32) las nman<sup>(1)</sup> ḥbras-bu bcaas-ñid<sup>(3)</sup> dan || ḥgro-ba-dag kyān<sup>(4)</sup> yan-dag byad ||

de-yi ran-bshin yon<sup>(2)</sup>-ḡes dan || s<sup>(3)</sup>kye-ba med-pa-dag kyān bstan ||

(1) kyī, (2) yod-pa, (3) nman, (4) ḡin-tu brjod.

如<sup>ニ</sup>先平等說、彼諸業眞實 自性<sup>ヲ</sup>若了知 此說<sup>ク</sup>卽無生<sup>ト</sup>

「上の如き過失を遮せんとして世尊は、俗諦を破壊せざる義を最初に示して「諸業に果の有ること及び「果を食する五」趣を説き給へり。「その次に人々の此教理を實なりとする執著を對治せん爲に」彼「趣等」の自性」の緣起なる故に自性不生なる」を了知する「道」、及び「趣等の」無生「なる道」をも説き給へり。(三二一)

獨譯者の如く「平等」を allgemein と解した處で、諸業は眞實なりとは此論中先に説かれたるを見ない。所詮此漢譯も原文の委曲を傳へるものと見られない。

(33) dgos-pahi dbai-gis<sup>(1)</sup> rgyal-ba nman || no dan nahi shes<sup>(2)</sup> gsun<sup>(3)</sup>-pa lkar ||



phun-po khams dan skye-mched namis || de-bshin dgos-pahi dbai-gis gsums ||

(1) dbai-du, (2) ña-yi, (3) gsums ñar.

我トイフ如<sub>レ</sub>是所説、皆依<sub>二</sub>佛言敎<sub>一</sub>、如<sub>三</sub>其所<sub>二</sub>宣揚<sub>一</sub>、即蘊處界法<sub>モナク</sub>

「かく兩説の建てられたる中、今別用によりて説かれたるは何れぞ。曰く、我々所執は佛の破する處なれ<sub>モ</sub>」別用 (prayojana) に依りて勝者は我々所と説き給ひし如く、蘊處界をも同じく別用に依りて説き給へり。「そのの分別説無くしては世間の眞に入る方便無ければなり」。(三三二)

(34) ñhyun-ba-che la-sogs byad-pa || nam-par ges-su yai-dag ñdu ||

de ges-pas-ni hbral-ñgyur-na || log-par nam-brtags ma-yin-nam ||

大種等及識、所説皆平等、彼智現證時、無<sub>レ</sub>妄無<sub>二</sub>分別<sub>一</sub>、

「若し識が所總の相を取りて生ずる時の彼所縁は、識中に於て相起り自體を得已りて法の事性として大種等と分別せらるゝものなり。乃ち「大種」「大種所造、心、心所起」等と説かれたるものは識中に攝せらる。「今」若し彼「識自性無なること」を知るに由りて「彼識所生の大種が、色滅するとき影像滅する如く」離れたるときは、「彼大種等は影像の如く」邪に分別せられたるものにあらずや。

(三四)

本偈は前偈に於て、我々所、蘊處界等の所説が別用に依るものなりと述べたるにつぎ、それら所

説の蘊處界が正しく別用にして眞實の爲にするものでないから實には蘊處界等が虚誑であることを闡明せんとするものであり、その闡明せんとするに當り本偈に於いては理 (yukti) により、次偈は教 (śāstra) に由るのである。

漢譯は「大種等も識もその所説のあるは、我々所蘊處界等と同じく假に佛の言教に依りたるものであるから、そのことを知る智慧が現證するときには、假の言説所説の相は幻の如く滅びて假説ならぬ法の眞相を妄なく證知する」の意味であるから、前偈に對する本偈の意味が明瞭ならぬことに畢る。又本偈がそれを提示し、及び大乘二十頌論の所説とも比較し得る唯心論的思想をも漢譯の如くにては得表はさぬことであり、頗る價値の薄いものとならざるを得ぬ。

(35) mya-nān-ñdas-pa bden gcig-pur || rgyal-ba nams-kyis gan gsus-pa ||

<sup>(3)</sup> de-tshe llag-ma log min shes || mkhas-pa su-shig rtogs-par byed ||

(1) pu, (2) nam, (3) deñ-tshe, (4) log-pa, (5) rtogs mi-byed.

此一若如實ナルヲ 佛説爲ニ涅槃ニ 此最勝無ニ妄ニ 無ニ智ハ即分別ス

勝者は「不妄取の法なる」涅槃は實の唯一なりと説き給ひたるが故に、爾時智者は「此阿含によりて」餘の「涅槃以外の大種等」が邪(虚誑)なりと誰か解了せざる。(三五)

第三、四句を譯語の都合上、月稱引用偈を使用した。

本偈に依るときは「餘は邪にあらずと智ある人誰か解せん」となる。

漢譯の第三、四句にては蘊處界等を虛妄なりと知らしむることが出來ず、乃ち上來よりの諸偈の所説を承けて起れる本偈の意味がこゝにも亦不明瞭に畢る。その主因を考ふに、西藏譯に於ける de-tshé lhag-na は怖らく梵本にては “*tadāvageśa*” であらうが、漢譯者所用の原本にてはそれが “*tad viṣeśa*” (此最勝) と讀まれたるに由るものであらうか。

(36) ji-srid yid-kyi nam-gyo-pa || de-srid bdud-kyi spyod-yul-te ||

de-la yin-na hdi-la-ni || nes pa med par cis mi-jhñad ||

(1) yan.

若心有<sub>二</sub>散亂、與<sub>二</sub>諸魔<sub>一</sub>作<sub>レ</sub>便、若如<sub>レ</sub>實離<sub>レ</sub>過、此即無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>生

「かくの如く理教によりて伺察するとき、彼等蘊處界は自性不成なる故に」意の動く限り「是れ無明なる」惡魔の行境 (socarā) なり。かくの如くなればこゝに「彼蘊處界等の自性として生無きを知る時」は「意の起ること無きによりて魔の行ずる」過失云何で無たるを得ざるべき。(三六)

「hdi-la」(hdi-la) は月稱が特に「自性生無きを遍知すること」と釋したるに由るものである。

(37) hjig-ten ma-rig rkyen-can-du || gan-phyir saṅs-rgyas namṅs gsunṅs-pa ||

hdi-yi phyir-na hjig-ten hdi || nam-rtog yin shes cis mi-jhñad ||

ma-rig rkyen-gris hji-g-ten shes || hdi-lar dsogs-pahi sañs-rgyas gsuh ||  
de-phyir hji-g-ten hdi-dag kyan || nam-par tog-par cis mi-ñhad ||

如<sub>レ</sub>是無明<sub>ノ</sub>緣<sub>ナリ</sub> 佛爲<sub>ニ</sub>世間<sub>ヲ</sub>說<sub>フ</sub> 若世無<sub>ニ</sub>分別<sub>一</sub> 此云何無生

「又同じく説かんとして云ふ。諸佛は、「無明の緣によりて行云々として五取蘊なる」世間は無明の緣より起れるなりと説き給ひたるが故に、此世間は「自性不成」分別「のみ」なりと云何で「立す」べからざる。(三七)

漢譯の第二句に對する私の訓讀は漢文に對する無理な讀方ともならうが、此を普通に讀むならば「爲」は譯者の附會となるから獨譯者の如く更に挾註を要することになる。第三・四句は西藏譯のそれと意趣を異にするが、縦ひそのまゝに見るとしても「若し世間が分別なきときは此世間は無生となるのでないか」との意味であるべきであるから、「此云何が生すべき」となるか又は「云何が無生に非るべき」とならねばならぬと思ふ。

(38) ma-rig hags-par gyur-ba-na || gan-shig htag-par hgyur-ba de ||

<sup>(4)</sup> mi-ges-pa-las kun-brtags-par || ji-la-bu-na gsal mi-hgyur ||

(1) na ni, (2) gan rnam, (3) rnam, (4) de-dag mi-ges (5) ci-yi phyi-na.

若無明可<sub>キ</sub>滅<sub>ス</sub> 滅已<sub>ハ</sub>即非<sub>ハ</sub>生 生滅名<sub>ニ</sub>乘違<sub>一</sub> 無<sub>レ</sub>智起<sub>ニ</sub>分別<sub>一</sub>

若し無明滅したるときは、「世間が自性無なるによりて影像の如く」滅すべきものなることを、「前には」知らざるによりて分別したるなりと、云何で明にならざる。(三八)

上來は顛倒あるときは世間有ることを説き已り、今は顛倒なきときは世間無なることを示さん爲である。

(39) <sup>(1)</sup> gan-shig rgyu dan beas hbyun shin || rkyen med-par-ni gnas-pa med ||

rkyen med-plyir yan hjig hgyur-ba || de-ni yod ces ji-ltar rtogs || <sup>(3)</sup>

(1) rgyu yod-par-las gan hbyun-shin ||, (2) par, (3) ges.

有<sub>レ</sub>因即有<sub>レ</sub>生 無<sub>レ</sub>縁即無<sub>レ</sub>住 離<sub>レ</sub>縁若有<sub>レ</sub>性 此有亦何得

「自性としてあるものは縁を具しても起らず、變異を棄つる爲に住の縁に因することも無きに」因を具するときには生起することあり、縁無くしては住無く、「住」縁無き爲に滅する如きものは、彼れ「自性」有りと云何にして知られ得るか。(三九)

前偈は、虚妄なることを知らざる爲に分別したるものであるから自性不成なりと決定し、今偈は此を承けて此故に又世間は體無く影像の如く因縁所生なることを示さんとする。

西藏譯本及び月稱註に依る限り、漢譯第三句の「離縁若有性」の性は「滅」であれば良しきにと思はれる。併しそのまゝに見るならば、「縁あるとき物生するのであるが縁と關係なき自性有なる如きも

の若しあるとせば、かゝる自性有なるものは縁を以て更に生ずる様なること得られない」と解すべ  
ざらむ。

(40) gal-te yod-par sm-ra-ba rnam || dnos mchog shen-nas gnas-pa-ni ||<sup>(1)</sup>

lam de-ñid-ia gnas-pa ste || de-ia no-mtshar cui-zad med ||

(1) dnos-ia shen-par.

若有性可住 即說有<sub>二</sub>生住<sub>一</sub> 此中疑復多 謂有法<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>住

若し「諸法自性」有りと説く人々「地水火風の極微の如き常」法を執著して住する時、彼道に住して  
はそこに「勝慧ある人が」希有法「となすもの」毫も無し。(四〇)

「何故なれば有らざる法 (asadbhāva) に依ることが世間に於て希有の因とする所であり、有なる  
法 (sadbhāva) に依ることは希有の因にあらず。故にその究竟義 (siddhānta) 中に有を説き有を了  
知せんとする時には希有の因なき故に希有も無し」と月稱は補註する。云ふ迄もなく上來は自性不  
成世間虚妄を高調し、今は縁起を説かず法に自性ありと執するを難破するのであるが、次の偈に於  
ては此「希有」法を意味を變へて解釋し、有と云ふ有るべからざるものに依る希有の因をなす人々に  
歸して、かゝることを敢てする人々は希有(奇異)なりとて此を難する。

漢譯は「有性の知取せらるべきものありてそのものに生住と云ふ有爲の作用を認めんとするも、

有法は變化なくして固住すべきものなるにと云ふ疑が生ずるではないか」との意味に解せらるべきであるが、漢譯のかゝる意味に解せられたる所以の主なるものとしては、(1)「住」と云ふを執著する立場に在るの意味に解せずして「生、住」等を云ふ有爲相の一と見んとしたること、及び(2)「希有」の西藏語なる *no-mtshar* が *adbhuta* か、或は *vismaya* かその原語の何たるかは今暫らく此を確知することが出來ぬにしても、少くとも *vismaya* にはアプテに於て *wonder* と *doubt* と兩様の用例あり、*adbhuta* にもベエトリンクは *wunderbar* の他に *unsichtbar* なる用例を示せることであるから、所謂「希有」が漢譯に於て「疑」とせられたることをが見られる。

(41) *sans-rgyas lam-la bten-nas-ni* || *kun-la mi-rtag smra-ba rnam* || <sup>(1)</sup>

*rtsod-pas dnos rnam mchog gzun-bas* || *gnas-pa gan-yin de rmad-do* || <sup>(2)</sup>

(1) *thams-cad*, (2) *rtsod-pa yis-ni dnos-po-la*, (3) *chags gnas*.

若菩提可證 卽處處常語 若住性可取 此說還有生

「緣起なる」佛の道に緣りて一切「諸行」は「緣起なるが故に」無常なりと説く「毘婆沙師、經量部等の」人々の、「一切無常なりと許しながら、空義の説に對する」諍論を以て、諸法「の自性成立」を執じて住することは、實に奇異なり。(四一)

即ち中論青目釋の始め、歸敬偈の二度掲出せらるゝ中間、中論の造論意を示す中に「佛滅度後、

後五百歳、像法中人根轉鈍、深著諸法、求十二因緣五陰十二入十八界等決定相、不知佛意」云々とて此偈と同じ趣意を表はして居る。

前に述べたる如く此偈に來りては希有の意味を「奇異」に解するのであつて、月稱は「崇仰すべからざるものに崇仰すと云ふ語の如く、希有、未曾有の聲なる讚嘆する語を以てこゝには貶斥する」のであると補註してゐる。

漢譯を普通に解するならば勿論、獨譯の如くであるが、若し此漢譯も西藏譯二本と同じき意味に立つものとせば、漢譯者の意味が云何様でありしにせよ、せめては「若し菩提の證せらるべき道にありながら處々に常を語り、若しは自性固住を取るべきを語らんかそは生盡さるのに道に出でずして還て生を招く」との意味に解すべきでないか。即ち漢譯者にては「佛」が「菩提」と讀まれ、第三句の「住」を解すること前偈の場合の如く、又第四句の「生」とは“adbhūta”が“udbhūta”とも誤まるべき状態にありたるか、又はその bhūta を特に bhūta とも讀まんとしたるかであらねばならぬ。

(42) hdi hām deho shes gañ-du || nam-par dpyad-nas mi-dmigs-na ||

rtsod-pa hām de bden [-pa] shes || mkhas-pa su-shig smra-bar hgyur ||

de-ni hdi shes gañ-dag-la || brtags-na rab-tu mi-dmigs-na ||

bden-pa de-ni hdiho shes || rtsod-pas mkhas-pa su-shig smra ||



若謂「法有實」 無智作「是說」 若謂「法有處」 取亦不可得

「緣起を許し佛道に依る人には諸法自性として不生なれば、」何れの法を伺察する時にも、此或は彼と知られ「ず。知られざる時は彼或は此を他に對して説くべからず。他に對して説くべから」ざるに、證論をなし、又は「自らの許す」彼「法」を實なりと語るが如きを、智ある人は誰かなすべき。

(四二)

漢譯の上半偈に「實(satya)」の字及び「無智」の智(pañña)あるより見て此上半偈は確かに西藏文の後半偈に對するものなるべく、その後半偈の「不可得(anupalabhi)」は西藏譯第二句の終なる“mi-dmigs”に相當するものであるからその後半偈は西藏譯の前半偈たるべく、夫故に此漢譯文は「法實ありと無智者は云ふ。法に色は是なり識は彼なりと自性を定むることの所見は「自性不成の緣起法に於ては不可得なるに」と解釋するとき辛くその意味庶きを得るものである。

(43) (1) gan-dag gis-mi ma-brten-par || bdag gam hjiḡ-rtēn mñon-shen-pa || (2)

(3) de-dag kye-ma rtag mi-rtag || la-sogs la-bas lphroḡs-pa yin ||

(1) ma-brten-par-mi gan-dag-gis, (2) chags-pa,

(3) rtag dan mi-rtag sogs la-bas || kye-ma de-dag phroḡs-pa yin ||

法無生無我ニミテ 智悟ニ入實性 常無常等相 皆由ニ心起ヲ見

若し「縁起自性無なるの義を悟了せず顛倒せるによつて、影像の如く自性無き五蘊法」に縁らずして、「自相成立の心又は五蘊に於て」我又は世間なりと執着せんか、痛むべし、彼等は常無常等の見によりて奪はれたるなり。(四三)

漢譯の上半偈は西藏二本に云ふ所と反對の義を述べ、爲に後半偈との連絡不明となる。

(44) gan-dag bren-nas dnos-po nmanis || de-ñid-du-ni grub hdod-pa ||

de-dag-la yan rtag sogs skyon || de-dag ji-ltar hbyun mi-hgyur ||

(1) yan-dag-ñid-du, (2) kyi, (3) skyon de.

若成ニ立多性一 即成ニ欲實性ヲ 彼云何非ニ此 常等生ニ過失一

若し人「五蘊と我とを」縁に縁りて「起れりと認許しつゝ」も諸法を實に成せらると欲んか、彼等には常等の過失云何で起らざるべき。(四四)

前偈は非縁起法、自性成立を稱ふる數論等に對して述べ、此偈は内道有部等に對して述ぶるものとされて居る。

本偈の漢譯「多性が成立し得るならば自性の實有も成立し得られんも、かゝる時には常等の過失生ずるであらう」とは、少し變ではあるが意味の通せぬこともない。然るに漢譯の「多性」は西藏譯にては「縁生(pratitya)」であり、次の第四五偈の第一句「器成立一性」の「一性」も同じく「縁生」であ

りて、かゝる縁生とは反對な一多性が漢譯中に譯出せられたのは云何なる所以であらうか。次の偈はさておき今偈の如きその「多性」が「縁生」でさへあれば大略意味が通するのであるから。

(45) gan-dag brten-nas dhis-po rnam || chu-yi zla-ba la-bur ni ||

yan-dag na-yin log-min-par || hdod-pa de-dag kvas mi-lphrogs ||

若成<sub>二</sub>立<sub>一</sub>性、所欲如<sub>二</sub>水月<sub>一</sub>、非<sub>レ</sub>實非<sub>二</sub>無實<sub>一</sub>、皆由<sub>二</sub>心起<sub>一</sub>見

若し人、縁生の諸法を、水月の如く、實にあら「ざる故に常論にあら」ず、「而も世間に於て實の如く見ゆるが故に非實にもあらずして斷論即ち」邪「論」にあらずと許さんか、彼等は見によりて奪はれざるなり。(四五)

即ち本偈は有無を破する縁起の本義を述ぶるものにして、月稱が此下に於ける註釋は上來の諸偈中殊に詳細に亘り、「自性無なる時は物の變異なく後に有となることもなし。因縁有りとも生じ得べからず。此過失を棄てんとて自性有と許せば、已に生じたるものゝ如く因縁に依りて起らず諸縁又無意義となる。故に縁生には自性の有無を捨て、此縁を以てのみ起れるが故に影像の如く、自性としての成立無しと許すべし」とて聖天の四百觀論第二六五偈「因中有果と許し無果と立する處には家の爲に柱等の莊嚴無意味となる」を引用し例釋して居る。

漢譯は「若し一性を成立せんも、その欲ふ所の一性とは實には水月の如く實にあらず無實にもあ

らざるべきものなり。而るに一性を成立するはその心、見を起すに由るなり」と意味を解すべきであるが、前偈の下にも一瞥したる如く所謂「一性」とせるが頗る不可解であり、又第四句に於ては、見によりて奪はれたることを述べる第四三偈の終と同一の説示をなし、かくして外道の無縁起説より有部等の誤まられたる縁起の解釋へ、それより正道理へと次第して述べる上來よりの一脈の意味が遂に伺はれ得ざることをなつて居る。

以上第四〇より四二偈に至ると、第四三より四五偈に至るとは、その兩者の説相に於て異なる處はあるが、兩者等しく外道説より有部等へ、それより般若空觀へと三段階を以て、中觀論者が内外教學中に於けるその所宗の意味を種々に反覆し述べたるものと見らるゝ。その點に於て此等二連の所述は上第三〇偈の所述とも又對應せらるべきである。

(46) dnos-por khas-len yod-na-ni || <sup>(3)</sup>hdod-chags she-sdan <sup>(4)</sup>hbyun-ba yin ||

la-ba mi-zad <sup>(3)</sup>ma-ruñ <sup>(3)</sup>hbyun || de-las <sup>(4)</sup>hbyun-bahi <sup>(4)</sup>rsod-par <sup>(4)</sup>hgyur ||

(1) yi, (2) mi-bzad, (3) ddsin, (4) byun.

貪瞋法極重 由是生見執 諍論故安立 離性而執實

〔此縁起の法性を了知せず、法の自相を分別して〕法を立 (pratijñā) することあるときは、〔自宗を現貪する相なる〕貪と〔他宗に向背する相なる〕瞋とより起る、堪に難く害毒ある見の執着あり。〔見

の執あるときは「彼」見執「より起れる」諍論もあるべし。(四六)

西藏譯の第一句にあるものを漢譯が終に持ち來れることは明かであるが、それが爲に終に來れる故「安立」以下の諸語が何を云ひ表はすか明かでない。「安立」(怖らくは *pratiṣṭhā*)と「執實」とは自性有りとする緣起法に反對した思想であるが「離性」は有自性論を破して緣起無自性を表はす。此兩者が「而」によりて結ばれることは頗る異である。

(47) *de-ni la-ba kun-kyi rgyu || de-med non-moṅs mi-kye ste ||*

<sup>(1)</sup> *de-phyir de-ni yoiṅs-ḡes-na || Ita dan ṅon-moṅs yoiṅs-su ḡbyan ||*

(1) *de-bas.*

彼因起<sup>二</sup>諸見、見故<sup>三</sup>生<sup>三</sup>欲惱、若此正了知、見煩惱具盡

「實にかくの如くなるが故に」(彼)法を立すること(は)「初、中、後際を分別してそれを取ることに墮入る故に」凡ての見の因なり。彼(見)無きときは「自見に貪着しそれより我慢となること及び他見に對する瞋等の」煩惱生せず。されば彼(法)を「實相の如くに」了知する時、見と煩惱とは清めらる。(四七)

(48) *gañ-gis de ḡes ḡgyur śānṅ-na || bṛten-nas ḡbyun-ba mthoñ-ba ste ||*

<sup>(2)</sup> *bṛten-nas sḡye-ba na-sḡyes-bar || de-ñid mḡkhyen-pa mchog-ḡis ḡsuñṅ ||*

(1) she-na, (2) rten-cin, (3) skyes, (4) yan-dag.

當<sub>レ</sub>知法無常 從<sub>レ</sub>緣生故現 緣生亦無生 此最上實語

云何にしてそを知るべきか。「そは」眞性を知る最上者(佛)によりて、緣起を「正」見して、緣生のものは不生なりと説かれたるなり。(四八)

月稱の註する所によるに「云何にして知るか」との異論者の問は、「諸法緣起の故に自性不生と云ふが緣生せるものは必ずや已生相 (uḥpannātra) あり。そのものに「不生」なる聲を云何にして施設し得るか。不生のものは緣生と云ふべからず」との意味であり、それに對する造論者の答は「緣起は自性不生であり、顛倒性として起れるに非るに異生はそれを自性として生ありと分別し、執着して雜染せらる。佛その雜染を斷たん爲に、緣生のもものは不生なりと説きたるにて、緣起自性不生の説法は諸法の自性に對する執着を遮せん爲なり」と述べる。即ち本偈は諸法不生と云ふも「生せるものを不生と云ふ」、自性あるものを自性なからしむと云ふ相違を敢てするものではなく、自性として不生なることを了知せしむるのであると云はんとするものである。

漢譯の意味甚だ明瞭ではあるが、西藏譯に於ける意味とは別なことを云ふのである。

(49) log-pahi ges-pa<sup>(1)</sup> zli-gnon-pa || bden-pa min-la bden ḥdsin-pahi ||

yois-su ḥdsin daiḥ tsod sogs-kyi || rim-pa chags-las ḥbyun-bar ḥgyur ||<sup>(2)</sup>

(1) ges-pas, (2) gin-tu byun.

衆生邪妄智 無<sub>レ</sub>實謂實想 於<sub>レ</sub>他諍論興<sub>レ</sub> 自行顛倒<sub>レ</sub>轉<sub>ズ</sub>

「何故なれば」若し人邪智によりて障げられたる時は、「諸法緣起虛誑にして」實に非るを實なりと執る着 (sneha) より、「我所なりとする」遍執 (Parigraha) と「欲に着し見に着する」諍論「と鬭争」等次第して起るべし。(四九)

「故に實に非る法を實なりとする想を遮せん爲に世尊は緣起を説き給へり」と月稱は補註し、前偈を承けて自性不生なる緣起説法の設けられたる所以を述べんとするものである。

(50) <sup>(1)</sup> che-bahi bdag-rñid-can de-dag || nams-la phyogs med rtsoḍ-pa med ||

gan nams-la-ni phyogs med-pa || de-la gshan-phyogs ga-la yod ||

(1) rtsoḍ med che-bahi bdag-rñid-can || de-dag-la-ni phyogs med-do ||

自分不<sub>レ</sub>可<sub>レ</sub>立 他分云何有 自分俱無<sub>レ</sub> 智了<sub>レ</sub>無<sub>レ</sub>諍論<sub>一</sub>

「若し人緣生の法を知取せざるべき」彼等大心ある人々には宗 (parisa) 無し。「宗無きときは他宗との」諍論も無し。「若し自宗無なることも他宗壞せざるにはあらず、他宗あるときは自宗も無きにあらずと云はゞ」宗無き彼人には他宗何處にか有あらん。(五〇)

(51) gan yan ruñ-bahi gnas rñed-nas || ñon-mois sprul gñud gyo-can-kyis ||

zin-par gyur-te gah-gi sems || gnas med de-dag zin mi-hgyur ||<sup>(3)</sup>

(1) gdugs gyon-can, (2) hgyur-ro.

有<sub>二</sub>少法可<sub>レ</sub>依 煩惱如<sub>二</sub>毒蛇<sub>一</sub> 若無<sub>レ</sub>寂無<sub>レ</sub>動 心即無<sub>三</sub>所依<sub>一</sub>

「かくの如く法 (Dhava) 無きによりて自他宗無き時、かくの如く見る人の煩惱は必ず滅すべし。何故なれば」若し何等かの「依るべき」所住にてもそれを得るときは、奸猾なる煩惱の毒蛇によりて捕へらる。されど若し人「有體を見ることなきによりて」その心「自他宗として固執する」所住(所縁)無きとき、彼人等は捕へられず。(五一)

獨譯者は漢譯の第三句を不住涅槃不住生死の意味に解する。西藏譯の「捕へらる (zin-par gyihra)」の意味を漢譯者がかく義譯したるもならんか。

(52) gnas-bcas sems-dan ldan rham-la || non-mois dug shen cis mi-hbyun ||

gan-tshe the-mal hdu-g-pa yai || non-mois sprul-gyis zin-par hgyur ||

(1) gnas-dan bcas-pahi sems yod-la ||

煩惱如<sub>二</sub>毒蛇<sub>一</sub> 生<sub>三</sub>極重<sub>レ</sub>過失<sub>一</sub> 煩惱毒所<sub>レ</sub>覆 云何見<sub>二</sub>諸心<sub>一</sub>

「色等の自性を想ふときは煩惱を斷たんと欲ふとも煩惱斷たれざることを示さんとて云ふ」。所住を具する心有る人には「彼所住が意と相應して存するときば貪、相應せざるときは瞋止息し難き故



に「煩惱の大毒云何で起らざる。」「相應と非相應との」「兩者に非る「捨 (upēkaṣṭhā)」位に在りても、「無明の隨眠なる」「煩惱の蛇によりて困憊せしめらる。(五二)

西藏譯偈、釋の意味によりて漢譯の前半偈に於ては貪瞋等の生ずることを「生極重過失」と稱し、後半偈に由りては捨位に於けるも自性と増益する處には無明によりて覆はれることを述べたるものと解釋せらる。

(53) byis-pa bden-par hdu-ges-pas || gzugs-brñan-la-ni chags-pa bshin ||

de-ltar hij-rten rmoñs-pahi phyir || yul-gyi gzeb-la thogs-par hgyur ||

如<sub>下</sub>愚見<sub>ニ</sub>影像<sub>一</sub>、彼妄生<sub>ヲ</sub>實想<sub>ト</sub>、世間縛亦然、慧爲<sub>ノ</sub>癡所<sub>ノ</sub>網

「愚癡常に起りて昏迷せるによりて眞性を見ることより覆はれたる」「愚夫が、「愚癡の力によりて起りたる法の自相を」「實なりと想ふによりて、影像に於て「物ありと執じ」著する如く、その如く世間は「無明を具し」癡迷せるが故に、「法の有を諍諍することに執著し、貪瞋慢等によりて自在無く、」境の獄舎中に於て障礙せられる。(五三)

(54) bdag-ñid che rnams dños-po-dag || gzugs-brñan la-bur ye-ges-kyi ||

ni-g-gis mthob-nas yul shes-ni || bya-bahi hdam-la mi-thogs-so ||

dños-po gzugs-brñan la-bur-ni || ye-ges ni-g-gis rab-mthob-na ||

bdag-'nid chen-po de-dag-ni || yul-gyi 'dam-la ni-chags-so ||

性<sub>レ</sub>喻如<sub>ニ</sub>影像<sub>一</sub>、非<sub>ニ</sub>智眼境界<sub>一</sub>、大智本不<sub>レ</sub>生<sub>ニ</sub>、微細境界想<sub>一</sub>、

大智ある人等は智眼を以て諸法を影像の如しと見る故に境なる泥に著せず。(五四)

月稱は補釋して「諸賢者にとりては、影像に於て「知」覺の起ると同じとの語なり」と云ふ。

(55) byis-pa nams-ni gzugs-la chags || bar-ma-dag-ni chags bral 'gyur ||<sup>(1)</sup>

gzugs-kyi rab-bshin gce-pa-yis || blo mchog ldan-pa nann-par grol ||<sup>(2)</sup>

(1) 'idog-chags bral, (2) dag-ni.

著<sub>レ</sub>色謂凡夫 離<sub>レ</sub>貪即小聖 了<sub>ニ</sub>知色自性<sub>一</sub> 是爲<sub>ニ</sub>最上智<sub>一</sub>、

諸愚者は「不淨なる」色に著す。中間の者は「不淨に在るを厭い、色に數多く苦の集まれるを見て、

色に於ける」貪欲と離「れて靜慮と無色定に入ることを得」る。即ち欲界を超越したるものなり」。色

の自性「無し、影像の如しと」知るによりて最上智を具する人は解脱す。(五五)

(56) sdug-sñam-pa-las chags-par 'gyur || de-ias bzlog-pas 'hdod-chags bral ||<sup>(1)</sup>

sgyu-mahi skyes-bu ltar dben-par || mthoh-nas mya-ñan 'dad-har 'gyur ||<sup>(2)</sup>

(1) sdug-ches, (2) ldog.

若<sub>シ</sub>著<sub>レ</sub>諸善法<sub>一</sub> 如<sub>シ</sub>離<sub>レ</sub>貪顛倒<sub>一</sub> 猶<sub>レ</sub>見<sub>ニ</sub>幻人<sub>一</sub>已<sub>ニ</sub> 離<sub>ニ</sub>所作求<sub>レ</sub>體<sub>一</sub>

龍樹の六十頌如理論といふ

(1) 愛心に貪著す。(2) それより相違したる時は貪欲と離る。(3) 幻の士夫の如く「自性を」離れ「空」と見るによりて涅槃す。(五六)

此偈は見らるゝ如く前偈と同じき意味のことを繰返したるものにして、(1)は前偈の愚者色に著するに當り、(2)は中間の者に相當し、(3)は最上智を具する者にして、月稱は「聲聞、緣覺、世尊なり」と知らるべし」と註する。

漢譯の「善法」には怖らく *subha* にして西藏譯の *sdug* なるべく、「顛倒」は *viparita; bzlog, ldog* なるべし。故に漢譯者が云何なる意樂なりしにせよ、此「顛倒」は煩惱のことを示す顛倒に非るべきは勿論である。

(57) *log-pai ges-pas mñon-gduñ-pai || ñon-mois skyon nams gañ yin-te ||*

*ños dan ños-med nam-rtog-pa || don ges-igyuñ-la mi-ñbyuñ-ño ||*

知<sub>三</sub>此義爲<sub>レ</sub>失 不<sub>レ</sub>觀<sub>三</sub>性無性<sub>一</sub> 煩惱不可得 性光破<sub>三</sub>邪智<sub>一</sub>  
邪智によりて逼惱せらるゝ處に起る煩惱の過失は、有性と無性とを觀察し、義を了知する處には起らず。(五七)

月稱の註によるに本偈は、前偈に云ふ所の「幻の士夫の如く自性を離れたりと見て涅槃すること」は云何にしてあり得るかとの問に對して、義を了知する處には境を緣することによりて得らるゝ煩惱

惱の逼害無き故に必ず涅槃する旨を述ぶるものである。

月稱の註には「逼害の性質あるは逼害あるなり。邪智によりて逼害せらるゝ故に邪智によりて逼害せらるゝなり」と云ひ、偈に於ては格の略せられて述べられたるものが註釋に於ては格を具備せる文章として出され、それが譯に於ては同じ語の反覆せらるゝ形として見らるゝ彼様の註釋文あるを見る。察する處本偈の原文は語格等の多く略せられたるものありて、月稱のかく註釋を作しおける如く意味を取ること困難なるものがあつたのであらう。漢譯者が殆ど同じ原典なりしことの見らるゝ語を等しく用ひながら、その譯文に見らるゝ如き困難な譯文を作製したるのも亦此に基づくものでなからうか。

(53) gnas yod-na-ni hdod-chags dan || hdod-chags bra-bar hgyur shig-na ||

gnas med bdag-nid chen-po nams || chags-pa med-cin chags bral nin ||

(1) bral-ba dmigs hgyur-na ||

智離<sub>レ</sub>染清淨<sub>ナリ</sub> 亦無<sub>ニ</sub>淨<sub>モ</sub>可<sub>レ</sub>依<sub>ル</sub> 有<sub>レ</sub>依<sub>即</sub>有<sub>レ</sub>染 彼<sub>ノ</sub>淨<sub>モ</sub>還<sub>テ</sub>生<sub>レ</sub>過

「愚者は法の自性を増益 (aropa) する故に」所依有るとき、染法 (raga) と離染法 (ariga) との想はるゝことあるべし、染法と離染法の所依を分別する故に所縁の境に染まれること (rakta) 及び染まらるゝこと (arakta) の相あるべし。されど心大なる者は「自性を増益することなき故に、そ

こに染まれるものが想はれ、染まざるものが想はるゝ所の「所依なければ、染まれるもの無く、染と離れたるものもあるにあらず。(五八)

即ち所依なく所縁なくして涅槃することを述べる。漢譯は西藏所傳の後半偈と前半偈とを次第前後顛換して述べたものである。

(59) *gāt-dag nām-par ben snām-du* || *gyo-baḥi yid kyañ mi-gyo-ba* ||<sup>(2)</sup>

*ñon-noms sprul-gyis dkrugs-gyur-pa* || *mi-zad srid-paḥi rgya-mtsho bregal* ||<sup>(3)</sup>

(1) *pa-la*, (2) *mi-gyo-ste*, (3) *mi-bzad*.

極惡煩惱法 若見<sub>ニ</sub>自性離<sub>一</sub> 卽心無<sub>ニ</sub>動亂<sub>一</sub> 得<sub>レ</sub>度<sub>ニ</sub>生死海<sub>一</sub>。

「かくの如く伺察するに」若し人、「依るべき處も」自性を離れたり「趣 (*gat*) は空なり」と知りたるとき、「彼人には」動く意も動かさず、煩惱の蛇によりて擾亂せられたる堪む難き有の海を渡りたるなり。(五九)

漢譯の第一句は西藏所傳の如くに第四句「生死海」の形容句として存せねばならぬ。爾らざれば獨譯者の示したる如く一行の偈の中に意味の連絡のなき二個の事柄が述べられる過失となる。

(60) *dge-ba ḥdi-yis sḥye-ba kun* || *bsod-nams ye-ḡes tshogs bsags-te* ||<sup>(1)</sup>

*bsod-nams ye-ḡes-las byuñ-baḥi* || *dam-pa ḡñis-ni thob-par ḡḡḡ* ||<sup>(2)</sup>

(1) skyeh-o, (2) byun-ha

此善法甘露、從<sub>二</sub>大悲<sub>一</sub>所<sub>レ</sub>生 依<sub>三</sub>如來言宣<sub>一</sub> 無<sub>二</sub>分限分別<sub>一</sub>

此「論 (prakarana) の」善を以て、凡ての人々をして福智の資糧を積ましめ、福と智より出する「色身と法身との」二妙を得せしむべし。(六〇)

月稱は此偈を以て論の善法を廻向する爲であると述べて居る。漢譯は此論の善法が如來の教説に依り、從つて大悲より流出する所であるから此を分限し分別すべきでないとの意味に取るべきものであらうから、夫故に廻向の意味は表はれない。又その語より推して西藏所傳のものと同じ原本に依れるものとは思はれない。これ漢譯にては廻向等を述べるものは、そのことの爲に別に漢譯のみに存する次の長句の六行偈の第三等に於て「此義甚深復廣大 我爲勝利故讚說 如大智言今已宣 自他癡闇皆能破。……諸解脫事而何失」云々と述べる處にそれを讓り、此第六〇偈の如きは單に此論が如來の教説を承受して宣説する等の内容に更へられたのではないであらうか。(をはり)

本論偈の獨逸譯本は宇井博士の御好意により博士所藏の書を借覽することを得た。

茲に記して謝意を表します。